

# 2001年度(第24回) 日本学生オリエンテーリング選手権大会 報告書



**期間** 2002年3月8日～10日

**場所** 栃木県矢板市・塩谷郡塩谷町

【主催】 日本学生オリエンテーリング連盟

【主管】 2001年度(第24回)日本学生オリエンテーリング選手権大会実行委員会

【後援団体】

矢板市、矢板市教育委員会、矢板市観光協会、  
塩谷町、塩谷町教育委員会、塩谷町観光協会、  
栃木県、栃木県教育委員会、栃木県観光協会、  
たかはら森林組合、栃木県オリエンテーリング協会  
毎日新聞社

【協賛団体】

株式会社 日本旅行



マスコット やまちゃんとはっくん

# 目次

<p>ごあいさつ 大会コントローラ - 報告 矢板インカレ地図調査報告 将来への提言 【クラシック競技】 クラシック競技優勝者コメント     ME 筑波大学4年 小泉 成行     WE 京都大学4年 番場 洋子 クラシック競技入賞者コメント 【リレー競技】 リレー競技優勝者コメント     ME 京都大学4年 許田 重治     WE 東京女子大学4年 山本 真美 リレー競技入賞者コメント 【コース解説】 クラシック競技 解説 リレー競技 解説</p>	<p>トレイル0 報告および成績 【データ一覧】 クラシック競技全コントロール・地図 クラシック競技 選手権の部 スタートリスト クラシック競技 選手権の部 成績 クラシック競技 選手権の部 ラップ表 クラシック競技 一般の部/高原山麓 成績 リレー競技全コントロール・地図 リレー競技 選手権の部 成績 リレー競技 選手権の部 ラップ表 リレー競技 一般の部/高原山麓 成績  新聞報道・市報 広告 大会役員・スタッフ一覧</p>
--	--

## 2001年度（第24回）日本学生オリエンテーリング選手権大会入賞者

9日 クラシック競技ME（男子の部）			9日 クラシック競技WE（女子の部）		
<b>優勝</b>	小泉 成行	筑波大学	<b>優勝</b>	番場 洋子	京都大学
<b>準優勝</b>	許田 重治	京都大学	<b>準優勝</b>	宮内 佐季子	京都大学
<b>3位</b>	金澤 拓哉	東北大学	<b>3位</b>	石川 裕理	京都大学
<b>4位</b>	大嶋 真謙	北海道大学	<b>4位</b>	大塚 泰恵	金沢大学
<b>5位</b>	青木 博人	東京大学	<b>5位</b>	山本 真美	東京女子大学
<b>6位</b>	佐々木 良宜	筑波大学	<b>6位</b>	高橋 ひろみ	慶應義塾大学

10日 リレー競技ME（男子の部）		10日 リレー競技WE（女子の部）	
<b>優勝</b>	京都大学	<b>優勝</b>	東京女子大学
<b>準優勝</b>	東京大学	<b>準優勝</b>	東北大学
<b>3位</b>	早稲田大学	<b>3位</b>	筑波大学
<b>4位</b>	東北大学	<b>4位</b>	千葉大学
<b>5位</b>	筑波大学	<b>5位</b>	京都橘女子大学
<b>6位</b>	新潟大学	<b>6位</b>	相模女子大学

## ご挨拶



日本学生オリエンテーリング連盟会長 河合 利幸

波乱あり、逆転のドラマあり。涙と笑顔。今回のインカレもまた魅せてくれました。本当に素晴らしい3日間でした。私は観戦していただけなのに、ひとり帰途の車中、疲労感の中にも満足感と幸福感の入り交じったような暖かな気分に浸ることができました。大会を成功裏に終えることができたのは、ひとえに、仕事や勉強や育児などの合間を縫って貴重な時間を割いて準備を進めてきた実行委員、この大会を目標に研鑽を積んできた各大学の選手やオフィシャル、土地への立ち入りや会場の提供など様々な面でご協力いただいた地元の方々、その他多数の関係者の皆様のご努力ご援助のたまものといえます。主催者の日本学連を代表して、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

それにしてもなんという天候だったのでしょうか。寒風に震えながら観戦することも多いインカレですが、記憶にないほどの暖かさや晴天に恵まれ、スキー焼けと間違われるほど日焼けしてしまいました。天気は運任せですが、今回ばかりは実行委員や選手の皆さんの熱意がきっと天に通じたのでしょう。

さらに今回は、OB・OG対抗リレー、選手権クラスのコースへのチャレンジクラス、地域クラブの紹介コーナーなどが企画され、インカレをより開かれたものにしてほしいという新しい動きもありました。加盟員数が減少し、過重な運営を余儀なくされつつある昨今、今後もインカレを継続していくには、負担を軽減するための方策を考えていかねばなりません。次回には四半世紀にわたることになるインカレの歴史の重みと、日本のオリエンテーリング界に与えてきた影響は決して軽いものではありません。今や学生オリエンティアの減少は日本のオリエンティアの減少につながります。

卒業生の皆さんには、後輩のためにも何らかの形で学連とのつながりを持ってほしいと思います。在学生の皆さんには、できるだけ多くの新入部員の獲得を目指してほしいと思います。大学のクラブ活動全体が低迷する中、やさしいことではないでしょう。ふとあなたが声をかけた新入生がインカレチャンピオン、そして全日本チャンピオンになるかもしれません。想像しただけでも愉快的なことではないでしょうか。組織の維持だけではありません。

**何よりも大事なことは出会うこと。オリエンテーリングとの出会い、人との出会い。出会わなければ何も始まらないのですから。**

以上

## ご挨拶



日本学生オリエンテーリング連盟  
平成13年度幹事長 芳賀 俊哉

### 思えば、あつい3日間でした。

矢板の空はよく晴れました。万全に準備した防寒着が、ほとんど無駄になるくらいあつかった、今年のインカレでした。そんな中、この日のために積み重ねてきた、決して薄っぺらでない財産を、大勢の人が持ち寄り炸裂させてくれました。おかげさまで、気温以上に「あつい」イベントになったと思います。

1年に1度、大学日本一を決める舞台、それがインカレです。もちろん、頂点にのぼりつめる人間はほんの一握りにすぎません。しかし選手達はお互いに高めあいながら、その頂にのぼろうとします。お互いが全力で走る姿を見て、お互いを勇気づけ、奮い立ち、力の限りを出し尽くせるという爽快感。皆さんは、この爽快感を味わうことができたでしょうか。

毎年これだけの規模の大会を、クオリティを向上させながら運営していくのは、並大抵ではないと思います。様々の工夫をこらしてくれた運営スタッフの皆様には本当に、頭が下がる思いです。大会実行委員会の方々、地元・矢板の皆様、大会準備にご助力を頂いた皆様に、学連加盟員一同を代表し、厚く御礼を申し上げます。

今年度は、インカレの規則を大幅に改定しました。刻々とオリエンテーリングというスポーツを取り巻く環境が変わっていくなかで、最大限に楽しい大会になるように、インカレもまた徐々に変わっていくことでしょう。学生の皆さんには、そうした状況を楽しむだけでなく、自分達の持っているものを、積極的に楽しんでほしいと思います。ぜひ次年度以降も、激しく楽しいインカレを、学生を中心として、みんなで盛り上げてください。

最後に、インカレに関わってくれた全ての人達へ、今年のインカレもまたこうして一つの形を結ぶことができ、本当に良かったです。ありがとうございました。

## ご挨拶

2001 年度日本学生オリエンテーリング選手権大会

実行委員長 青柳 琢

第24回日本学生オリエンテーリング大会も、晴天のもと3日間の大会日程を無事に終えることが出来ました。これには地元栃木県矢板市・塩谷町の関係各位の大会に対するご理解とご支援が欠かせません。今大会の開催にあたりご尽力いただきましたすべての皆様に対しまして、心よりお礼申し上げます。また、大会に向けて一年間努力を惜しまず、例年に勝るとも劣らぬ熱戦を繰り広げた選手権出場の選手のみなさん、学生一般・一般併設クラスに出場すると同時に、観戦や応援を通して大会を楽しみ盛り上げてくださったすべてのみなさまにも心から感謝したいと思います。



今大会は、近年推し進めている少人数運営をより推し進める一方で、選手権クラスに出場する選手以外にも楽しめるように、事前にアンケートを取り、それをもとに新しい試みに積極的に取り組んだ、実行委員会なりにチャレンジングな大会となりました。もちろん、必ずしも全てがうまくいったというわけではなく、至らない点も多々あったとは思いますが、そこは実行委員会としても何が良くて何が悪かったのかを明確にして、今後のインカレに生かせるような提案を考えていきたいと思えます。但し、閉会式でも申し上げましたが、インカレは参加したすべての参加者によって作られるものです。来年、選手として出場できる学生のみなさんは、今年のインカレを振り返り、これからのインカレがどうあって欲しいかを仲間内で真剣に考えて、幹事会を通すなどして、要望を実行委員会にぶつける姿勢を忘れないでください。また、今回で卒業する人で、自分ならこういう大会にしたい。こうすればインカレはもっと楽しくなるというアイデアを持つなら、今後のインカレの実行委員となり、是非その想いを実現して欲しいと思えます。

### 一人一人の創意工夫によりインカレは変えられます。

今後もインカレが学生の最大の目標であり、また最高に感動できる舞台として発展し続けることを願いつつ、ご挨拶とさせていただきます。

# 大会コントローラ報告

コントローラ 柿並 義宏

コントローラ補佐 竹澤 聡

本インカレは、いろいろな意味で今後のインカレのあり方を考える分岐点となったインカレであろう。前回の愛知インカレが終了した時点で次回（つまり今回の矢板）のインカレ開催が決定していないという非常事態であった。これは、インカレの主催団体である日本学生オリエンテーリング連盟の幹事長が決まっていなかったため、組織上インカレ開催を決定することができなかったためである。そのため規則上2年前には組織されるべき実行委員会は、幹事長が決定した6月まで組織することができなかった。そのため、様々な準備が遅れて、学生諸君には迷惑をかけてしまった部分はある、その点はお詫びしたい。しかし、インカレの主催は学生である皆さんであため、日本学生オリエンテーリング連盟がきちんと運営されていかないとインカレを開催できないということを肝に銘じてもらいたい。

本インカレでは今後のインカレのあるべき姿を模索して工夫した部分がある。また、本インカレで、生じた重大な問題点について後述したい。

## インカレ永続的開催

栃木県では日光地区以外ではインカレがおこなわれてこなかった。これは栃木県が非常に渉外が難しい地区であり、インカレを開催することを許可されなかったからである。今回は、粘り強い渉外の結果、開催にこぎつけた。ただ、まだ実行委員会が正式に組織されていない時期で、地図調査をおこなうことができるまでの渉外までは、進んでおらず、これが正式に完了するまで調査をおこなうことを休止することとした。これは今後もこの地区でインカレを開催するための配慮であったが、地図調査のスケジュールに影響を及ぼす結果となってしまった。また、インカレ後の継続的な渉外も重要となってくるであろう。地元との関係を継続的に築くことで、次回以降のインカレ開催がスムーズに進むと思う。



（インカレ打ち合わせ風景）

## インカレのあり方

インカレとはどのような大会であるべきなのであろうか？これは主催者である皆さん一人一人が考えて欲しい。インカレの参加者数はついに 900 人を切ってしまった。肥大化したインカレ運営をスリム化するのも今回のインカレの目標であった。本インカレの実行委員の数は 59 名であった。しかし現在のようないんかレのスタイルでは凝れ以上減らすことは難しいであろう。もっと運営をスリム化するには思いきったインカレ改革が必要である。選手権クラスを特別扱いしない、演出を簡素化するなどがあげられるだろう。今後は、競技に直接関係しない部分（演出等）で皆さんの協力が必要となってくであろう。

また、選手権クラスの実力差も競技人口が減ったことにより、相対的に広がったように思う。リレー3人制も含めて、競技形態を考えなおすことも必要になってくると思われる（次回以降のインカレでは選手権で人数が減ることとなった）。

## コース距離

男子選手権クラシックにおいて、規定より短くなってしまった。規定 80 分にたいし、71 分 34 秒であった。1 割以上も短く、体力を問う課題が不十分であった。また、リレーにおいては男女ともに長くなりすぎてしまった。男子規定一走者あたり 50 分に対し、60 分、女子規定一走者あたり 45 分に対し、60 分であった。男子で 2 割、女子で 3 割以上も長くなってしまった。これだけ長くなってしまうと特に女子においてはクラシックと同様の課題が問われる結果となり、リレー本来の課題とは異なるものになってしまったことはお詫びしたい。こうなってしまった原因としては、十分な試走がなされなかったこと、会場レイアウト上これ以上短くすることは難しかったこと（特に女子）実力校の失格等が挙げられる。男子では 27 校中 17 校（63%）完走、女子で 24 校中 16 校（67%）であった。例年と比べて競技時間が長くなってしまった分、少なくなってしまった。

## 併設リレー 成績確定遅れ

併設リレーにおいて成績確定が非常に遅れてしまった。これはシステム障害に備えて用意した 2 系統のシステムが両方とも落ちてしまったためである。最終的にはビデオカメラで撮影していた画像をもとに処理した。バックアップのシステムのまで動かなくなってしまったことは全くの予想外であった。このようなことは頻繁にあることではないと思われるが。

## バスルートミス

選手権スタートへ向かうはずのバスが 1 台間違って会場に来てしまった。担当者が気付いて選手が降りることはなかった。バスの運転手には担当者から指示してあったのだが、間違われてしまった。会場付近で選手権の選手と交差する部分があるが、時間的にはやかたため接触することはなかったため実質的な問題はなかった。

## チャレンジクラスコントロール誤撤収

より多くのオリエンティアに開かれたインカレを目指し、併設大会を重視しチャレンジクラスを設ける等した結果、参加者はクラシック 220 名。リレー54 チーム、スプリント 26 名でまずまずの参加者を確保できた。今後の学生数減少を鑑みると、併設大会の参加者確保はインカレの継続的な開催に経済的に貢献するものである。一方で、競技中にコントロールを撤去してしまい一部併設大会参加者にご迷惑をおかけしてしまった。併設大会はどうしても選手権とのかねあいでスケジュールやコース回し等で後手に回るところがある。今後の課題としたい。

## リレー地図置き場

リレー地図置き場において、距離・コースパターンが事前に見えてしまうというトラブルが発生した。実行委員会で気付いた後、すぐに見えないように置きなおした。このような事態が起こった原因の1つに地図をビニール袋に入れたことがある。地図をビニールに入れることになったのは、地図印刷においてミスがあり、PP加工（ポリプロピレン加工）が間に合わなかったためである。地図を入れたビニール袋が地図より大きく、地図を奥まで入れて、半分に折った時にちょうど距離・コースパターンが見える状態になってしまった。この遠因として全体的な準備の遅れがある。

## 立入禁止区域

クラシックの日に、立入禁止区域になっている場所に入って応援している大学があった。そこから旗をもってゴールに向かう選手と併走していた。OB2 名、現役 1 名であった。その場所に行って応援していいかどうかを実行委員に問い合わせたらしいが、その実行委員の説明が悪く、勘違いをしてしまったようだ。そのため、それだけで、失格その他の処分をするのは難しく、また、会場から見える場所であり、併設大会のゴールからの帰路からわずかに入っただけの場所であるため、競技に大きく影響はないだろうとの判断から嚴重注意にとどめた。



（リレースターター/中村智晴）



# 矢板インカレ地図調査報告

地図作成担当 石澤 俊崇（早大OB）

## 1.活動実績

わたしが矢板インカレの地図作成担当を引き受けたのはいつだったか、正確なことは忘れてしまった。ただ、日光インカレの時がそうだったように、せっかくトレインから車で一時間程度の所に住んでいて、かつそれを行う力があるのだから自分が担当することになるのは当然のように思っていた。しかし、日光の時と違っていたのは、わたし自身には体調的な問題が発生していたということで、このことはインカレ実行委員正式発足前の中枢メンバーには4月の頭に知ってもらっていた。

矢板インカレは、より以前より構想はあったものの、実行委員会の正式発足が従来のインカレよりも大幅に遅れるという波乱の幕開けであった。しかしながら、地図作成に関しては委員会正式発足を待つ余裕がなく、調査に関しては2001年の3月に活動が始められている。

調査に先立ったトレイン選定はいわゆる業者であるところの山川氏が行ったとされている。後にかなりいい加減な選定であったことが明るみに出るが、ともかく山川氏の用意した調査原図である「下野軌道」をベースに調査を開始することとなった。調査初日はまだ雪の残る2001年3月3日であり、そのときのメンバーは石澤、山川氏のほかに、太田晃弘（東大OB）、千脇くんの4名であった。この調査は大谷川YHを宿として2日間行われたが、ところによってはひざ近くまで雪の残る状態での調査であったこともあり、あまり大きな成果は得られなかった。来年の本番当日は大丈夫かと危ぶんだものである。

本格的な調査開始に先立って、地元への渉外活動が行われた。もともと筑波大がきめ細かい渉外活動を行ってきた地域であったため、今回は筑波大から日本学生オリエンテーリング連盟への引き継ぎが行われたというかたちで話を進めた。渉外初回には筑波大現役の増田くん（当時3年生）を伴い、石澤、千脇が調査エリア各地区の町長さん宅へ挨拶に出向いた。主な交渉事項はトレイン使用者が筑波大から日本学連に変わったことのほか、4月から本格的な地図調査を開始すること、調査者は規定の腕章をつけ、身分を明らかにしていることなどで、円滑な調査活動を行うためのものであった。以後、このような渉外活動は担当の山口尚弘くんに引き継がれたわけであるが、尽力いただいたかいあって、地元とは良好な状態を保ったまま、最後まで問題なく調査活動を行うことができた。地元の皆さんと、渉外活動にあたった山口くんらに感謝したい。

4月の各週末より本格的な調査を開始した。調査者は主に栃木県内および近県在住者より招集した学連OBからなり、具体的には石澤（栃木）、千脇（茨城）のほか、水嶋（静大：栃木、後に埼玉）、白土（東北大：栃木）、渡辺（東北大：福島）、佐藤（東北大：福島）、金谷、田村、大家（3人とも東北大学院生：宮城）、岸野（東大：東京、後に群馬）、木俣（東京農大：東京）、小嶋（名大：栃木）といったメンバーがGWの宿舎期間を中心として一次調査を行った。一次調査の期間は当初6月いっぱいと考えていたが、各人の調査が思うように進まなかったことから、8月いっぱいまで延長された。

調査が思うように進まなかった最大の理由は調査原図としていた筑波大作成の旧マップである「下野軌道」が思った以上に違っていたためである。それは一部地域が大幅に違っているという問題ではなく、全体

的な問題であった。そこで5月に調査範囲の森林基本図とGPSを用意して測量を行ったところ、森林基本図はかなり正確であるが、これに下野軌道を合わせるためには大幅な修正が必要であることがわかった。したがって、これ以降は森林基本図に無理やり下野軌道を合わせたものを調査原図として調査をしたのであるが、結局時すでに遅く、調査はこれ以降も難航を極めたのであった。

9月15、16日の試走会にまともな地図を提供できなかったのは調査の遅れのほか、調査原図が途中で変わってしまったことによる作図のずれも原因である。これについては別の章で述べる。10月6、7、8には調査合宿を行った。実質的には二次調査であったが、ほとんど一次調査に近いような部分もあった。調査自体の成果に加え、この調査合宿ではこれまでの調査には関わっていなかった多くの実行委員から助力をいただいたことも大きな成果であったと思う。同様な調査合宿は11月18～21日の第3回試走会と同時に行われ、ここでも大きな成果が得られた。

このころの問題は、当初の予定範囲であった領域の改善のほか、完全新規範囲の調査遅れをあげることができる。この新規範囲については山川氏が行う予定となっていたが、全く手付かずのまま放置され続け、9月末のコントローラーおよびプランナー下見の後、本格的な調査に着手した。この範囲の調査において活躍したのは新たに加わってもらった井上くん(筑波大院生:茨城)であり、非常に大きな戦力であった。また、わたしは体調上の理由から約1ヶ月の休職中であったように、実のところ地図作成どころではなかった。

11月下旬に復職後、配置替えとなって主に九州の工場を支援する仕事となったことから、これ以降北九州駐在が大半となってしまい、物理的に調査を行うことができなくなってしまった。さらに大詰めの中旬には大きく体調を崩してしまい、作図どころではない日々が続いた。この頃のことを思うと最後はよく完成にこぎ着けた物だと思う。

2月には体調が回復し、9～11日の3連休には北九州から矢板に戻って調査を行うというようなことも可能となった。しかし、分割して作図していたO-CADファイルの結合が想像以上に大変な作業となってしまい、2月後半は何日も夜更かし状態が続いた。また、この作業を駐在先の北九州で行うにはノートPCを用いざるを得ず、デスクトップの倍近い労力がかかったのは悔やまれる。

インカレ本番前週ようやく地図は完成にこぎ着けた。最後は山川氏と千脇くん、井上くんがぎりぎりまで調査を行い、ファイル結合でおかしくなっていた部分の修正など仕上げをしてきていた。この間、我々地図作成部隊も大変であったが、これに振り回され続けたプランナーやコントローラーの皆さんの苦労もあって知るべきであろう。

## **2. 地図完成が遅れた理由**

もっとも大きかったと思うのは、先の章でも述べた調査原図のいい加減さである。しかも、これはわたしを選定したのではなく、業者たる山川氏が「下見を行った」上で選定したものである。実際わたしのもとは「下野軌道」に定規でグリッドを引いたものが送られ、これを調査原図として調査を始めるように指示があったのだ。

わたしとしても調査原図がおかしいことにはかなり早い段階、具体的には調査初日の雪の中で気がついていました。実際には5mしか離れていない道の分岐が原図では30m以上離れていることになっていたり、

道の角度が90°近く違っていたりするところがあったためだ。とはいえ、普通に考えたら既存のO-Mapをリメイクするのと、森林基本図からやりなおすのではかかる労力が大幅に違うため、そのまま無理やり調査を続行してしまった。返す返すも悔やまれる。

GWの調査合宿ではかの調査者の情報を聞いても、やはり原図があわないようであった。そのため、5月中旬になってGPSによる位置情報の取得を行った結果、原図としては、ことに絶対的な距離や位置として正確なのは、森林基本図の方であることが明らかになった。そこで、森林基本図をすべてスキャナーで取り込み、正確にグリッドを合わせて作図することであらたな調査原図とし、調査を再開したのだが、調査の途中で原図が変わっても、それに対応できるのは自分でOCAD作図ができる物だけであり、結局はあまり効果がなかったように思う。

ところで、調査者の人数およびその能力については問題があったと思わない。もちろん個人の能力は異なるから、必ず巧拙や早い遅いがあるわけだが、それが地図完成の遅れに直接影響したわけでないことは強調しておきたい。むしろ問題は、ちゃんとした形で調査範囲を依頼しなかったことであり、原図の問題のほか、調査範囲の境界の問題があった。たとえ森林基本図であっても最初からちゃんとした原図が用意でき、さらに、例えば境界はすべて調査済みというような形であったら、ほとんどのオリエンティアに調査が可能なのではなかろうか。というのは、終盤に投入されたGPS座標入り調査原図に基づく調査の能率は驚くべきもので、そこまででなくとも、確定点がいくつか得られていれば、調査の難度は大きく下がるものと気づかれたのだ。

計画と契約がなかったことを問題としてあげておきたい。誰がいつまでにどこの調査を終わらせる、あるいは地図として完成させておくのか。その計画があつてなきがごとしであったし、新規範囲やモデルイベント範囲は山川氏が調査を行う、という契約も結んでいなかった。そんなに大げさにするものではないとも思うが、おそらくこのままにもペナルティなしで終わるのは実行委員会、山川氏双方にとって良くないことだろう。多くの人が山川氏の身体的な問題を知ってはいるけれど、特に参加者たる学生諸君はそんなことを知りはしない。誰も、病気の体をおして調査してくれと頼んではいけないはずなのだ。少なくとも参加費にその分が上乗せされてはいない。

一方でインカレ運営の母体である日本学連の理事である山川氏だからといって、今回のようなめっちゃやがまかり通る筋はなく、大いに反省が必要であろう。もちろんそれを許してしまった我々実行委員会側としても反省しておくべき点は多い。振り返ると今回の地図作成は綱渡りの連続であり、また、モデルイベントの地図については予定外のものが予定の期間を過ぎて作成されている。こうした事実を一つ一つ再確認したうえで、今後のインカレ地図作成のありかたも含めた話し合いが必要であろう。

明確な契約がなかったとはいえ、我々は基本的にボランティアであり、山川氏はプロなのである。プロの分をボランティアが散々かぶって成立する大会運営など本来ありえない。たまたま問題なく大会が行われたからいいようなものの、正直クラシックの最初の選手がゴールするまでは不安で仕方がなかった。なにしろちゃんとした地図・コースでの試走は一度も行われなかったのである。決して忘れてはならない。

もう一つ、競技責任者と地図作成者の意志疎通不十分をあげておかねばならない。クラシックのコースを見て、最後の最後に調査した旧前高原範囲にスタート地区と、コントロールが一つだけだったのを見てがく

然としたのはなにもわたしだけではなかったはず。全体的に調査自体が遅れまくっていたため、仕方のない部分はあったが、もう少しくらいコントローラーとの対話をしておくべきだった。加えて、調査中にどんどん新しい道ができてしまったことも、競技、調査双方にとってつらいものがあった。調査は大変になるし、コースは簡単になると、うっかり忘れてしまうところであったが、もろもろの遅れの大きな原因の一つであったことは疑いようがない。こればかりは回避しようがないのであるが。

作図に関する意思統一の欠如も問題であった。結果的にはわたしが終始一人で描いたほうが早かったというほどで、明らかにわたしの指示が甘かったといえる。OCAD作図にはいろいろなノウハウがあり、それを伝授するせっかくの機会でありながら、ほとんどなにもせずに終わってしまったのは、これまた大きな反省点である。調査を完全に一日潰してでも、OCAD作図、特に多人数で一つの地図を作図していく場合のやり方と注意点について講習を行わねばならなかった。

### **3. 誰がなんのために調査するのか**

インカレの調査は主にその時の実行委員が行うものであろう。これまでも、これからもそれは変わらないと思う。今回の場合、結果的にはクラシックの範囲を実行委員が、リレーの範囲は山川氏と羽鳥氏、中村(弘太郎)氏の3人が、モデルイベントの範囲は山川氏が調査を行った。

インカレのマップというのはどういうわけか、日本で最高の精度を求められている。残念ながら、現状では選手の目標として成立する唯一の大会だからだ。しかし、実際にハイレベルな戦いをしてくれるのは、クラシックでシード級の、リレーでは名門と呼ばれる大学のほんの一握りの選手だけである。むしろどちらかというと、地図がかなりいい加減でも、そのことに気づきもしない選手が大半だ。そのこと自体に問題があるとは思わない。逆に、そんな状態であるにも関わらず、ハイレベルな地図を求められていることに疑問を呈せずにはいられない。

確かに自分が選手だったころは素晴らしい地図、コースで勝負できることに大きな意義を感じていたものだ。これに勝てば間違いなく学生日本一だと。しかし、日本一ではないのである。近年、インカレ後にもエリートで活躍を続ける選手が出ているものの、なかなかトップに立つことはない。そして、そのトップは多くの場合インカレよりも精度の低い地図、工夫のないコースで争われているのである。ここでそのことに關する批判をするつもりはないが、逆に言うと、それでもトップはトップと認められているのである。

だから、インカレの地図ごときは、実行委員が最大限の努力をしてつくればいいのであって、そのできが多少悪くとも、それはそれでいいと思うのだ。関東でインカレ運営が行われる場合、若い実行委員が中心となるので、余計に調査経験の浅い人間の手による部分が多くなる。だからといって、多くの部分をプロとかそれに近い、日本に数人しかいないような人達に依存してしまっただけは、いつまでたっても現状は変わらない。

最初から調査がうまい人なんていないし、学生時代の4年間のうち、真剣に調査したのなんて何年あるだろう。まして、大半の大学では大会運営の経験さえないのである。

そうであるならば、インカレの調査も多くは経験の場として活用するべきなのだ。地図調査は初めてという人がいても構わない。むしろ当然というような状態にしたい。もちろん範囲の広さ、難易度などはちゃんと割り振るし、バックアップの体制も整えておく。調査者育成であればいいが、調査体験の場となってもいい

いので、もっと「インカレ」だからといって構えずに、いろんなOB・OGに間口を広げたいものだ。

#### **4. 総括**

今回の地図調査は本当に綱渡りであったため、大いに反省し、次回以降のインカレでは同じことの内容に注意しなくてはならない。特に業者の遅れについてはあらかじめ明確な契約を結んでおくべきだろう。

とはいえ、調査合宿などもあり、実行委員による調査という面では少なくとも日光インカレよりも大きく改善されたように思う。せっかく人材は集まったのに、割り振りがうまくなかったのはわたしの大きな失敗である。また、OCAD作図のノウハウについて時間を割いて伝授するべきでもあった。

今回の矢板インカレが、どちらかというところとエリートよりも一般参加者に力を入れたように、今後のインカレ調査も一般調査者によるウェイトを増やしていきたい。周到的な準備をしておけば、可能なことと思う。

#### **5. 終わりに**

今回の地図作成に関わった、あるいは支えてくれた実行委員内外すべての方々に、そして、大会を盛り上げてくれた学生諸君を始め各大学のオフィシャルなどのOB・OGを含めたすべての参加者の皆さんに感謝の意を表したい。本当にありがとうございました。

2002年4月18日 北九州にて 石澤 俊崇

## 将来への提言

実行委員長 青柳 琢

### 【はじめに】

第23回日本学生オリエンテーリング選手権大会も全日程が終了し、この報告書をもって実行委員会の仕事も終わりとなります。最後に、日本学生オリエンテーリング選手権大会実施規則 第12条に従い、本報告書に将来の提言を以下に述べたいと思います。とは言っても、インカレ開催まで、及び開催期間中に起こった競技に関する出来事の経緯や報告とその問題提起等の重要な事柄は、大会コントローラー報告において記述してあるので、今後インカレをどうするか、どう変えていくかを考える題材としては、そちらも参照していただきたいと思いません。ここでは、「提言」と言うには少々ふさわしくないかもしれませんが、自分の準備段階からの運営経験を基に意見を感想を交えて書かせていただきます。

### 【少人数運営への取り組み】

ここ数年、参加者減少に伴う学連への収入減や関東地区以外でのインカレ開催で頭を悩ませる運営者不足の対応として、運営人数を減らし、スリム化された運営体制でのインカレ運営の試みがなされていますが、2001年度は例年より一層の少人数運営を推し進めました。一番の要因は、電子パンチングシステムを選手権クラスと一般学生とを同じくして、計時システムを一元化することにより、計算センターとゴールパートの要員を大幅に削減したこと。また、演出パートの要員も例年以上に削減にところであります。計時システムは、人数分のEカードの確保や管理等の不慣れから、かなりの負担増になってしまいましたが、少人数運営をする上では電子パンチングシステムは、欠かせないと言えます。早い段階からシステムの構築に取り組み、経験を積んだ熟練者が集まれば、今年よりもっと楽に運営できたと思われます。また、演出パート員の削減もゴールと演出ブースをパソコン同士をLANで繋いでパソコンでデータ整理を行った上で、タイムをプリンターで打ち出してしまう方式で人数を削減しました。もちろん、ここでも人員削減には、過去に演出経験に実績のある熟練者に負うところが大きかったです。結局のところ、少人数運営の実現には、いかに熟練者を集めるか、もしくは開催までに実行委員内に熟練者を育てるかにあると言えます。インカレの運営費削減は、学生の参加人数が減っている今、避けてられません。そして、経費削減には運営人数の削減が一番簡単なのですが、その一方で、ひとつだけ懸念することは、少人数化をこれ以上推し進める



(リレ-で優勝した東京女子大 山本さん胴上げ)

ことが、果たして将来インカレ運営者を 募る上で為になるかとも思います。人数を削減すれば、委員一人一人の負担はどうしても増大します。それに委員の運営能力や経験がある程度なければ難しくなります。そのため、熟練者を中心に実行委員が組織されるようになれば委員になるための敷居が高くなります。新しい人材の発掘という面では、より困難になるでしょう。かなり積極的な人員確保に奔走しなければ、いつまでも限られた人がインカレ運営を負うところになってしまうことでしょう。少人数化は、将来へのインカレ運営者の人員確保や育成をリンクさせて行わなければならないところに、その課題があると言えるでしょう。

#### 【併設クラスの扱いについて】

選手権クラスに対して、それ以外の学生一般の部(以後、学生一般)クラスは、選手権クラスと違って、実施規則ないこともあり、その年の実行委員会の裁量 に任されています。故に、学生一般クラスの規模や扱いは、選手権クラスをしっかりと準備できる体制があり、その上で実行委員会に、あと余力がどれくらい残っているかに大いに影響される部分だと思われます。今実行委員会では、インカレの参加者の大部分は学生一般クラスの参加者であり、たとえ選手権クラスがメインであっても、学生一般クラスの参加者がいなければ、インカレに使う地図すら作成する費用すらまかなえない現状を踏まえて、かなり併設クラスには力を入れました。コースのバリエーションを増やし、参加者の選択肢を増やすことで少しでも参加者を増やす試みをしました。宣伝不足もあり、クラスの 細分化による効果はどれ程あったのかは定かではありませんが、参加者を増やすための参加することに興味を持ちそうな、そういった試みは今後も必要かと思えます。しかし、毎年の 学連加盟員数の減少の前には如何ともし難いものがあったのも事実です。学生の参加者減少に対しては、共催の大会規模を大きくすることで、一般参加者を 募り、学生参加者減による収入の減少を少しでも補うことにも努めました。 インカレは選手権大会である一方で、現在のインカレを維持していくには、学生一般クラスへの参加者も大切に、少しでも学連加盟人数に対するインカレ参加者比も高めていく努力を、学生と共に、実行委員会は取り組まないといけないと考えます。また、学連加盟員数そのものの減少に対しては、もっと共催大会にも力を入れ、インカレと共催大会を一つの大会として、トータルでの参加者数を維持するという事も 視野に入れてインカレ開催を模索していく時期ではないかと思えます。

それは、別の 大会と共催することで、運営者も卒業生に限らず地域クラブ員や地元の方々との協力で 行う選択肢も得られます。もはや学生一般や共催大会による一般オリエンティアの参加なしにインカレの維持は無理な時期にあります。今後もインカレ開催を続けるならば、学生併設と共催大会の扱いは今後も充実させる必要があると考えます。

#### 【主催者としての学生】

インカレは学生が主役であり、どのように学生を率先してインカレへ関わりを持たせるかは昔からの一つのテーマでした。しかし、公平性の関係上、学生が運営に関われるのは、結局のところ開会式や会場の掃除等くらいしかないととも言えます。今大会は「トト郎」という企画を通じて、学生有志が主体なり自分達がよりインカレを楽しむことを模索し、それを実行委員会としても公平な立場を犯さぬ範囲でバックアッ

ブしました。学生がインカレに関わるということは、むしろ運営面の実務的なことに関わることよりも、こういった自分達（学生）が、よりインカレを楽しむことを企画し、実行委員会と一緒に大会を盛り上げることにあったと感じました。また、どんな大会にするのかを実行委員会との対話を通じて実現していくことが、インカレへの一番の関わりを持つこととも言えるでしょう。ですから、その意味でも今後も学生からのインカレを面白くする企画に対しては、実施規則を逸脱しない範囲で実行委員会は寛容であってほしいと思いますし、学生からも実行委員会へ提案や要望を現して行ってほしいと思います。

#### 【その他】

今大会は上記に上げた以外にも、多くの試みを行ったつもりです。

- ・参加費と宿泊費の振込み先・振込み期限の分割
- ・併設大会を充実させるためのアンケート
- ・選手権クラスと同コース（チャレンジコース）設置
- ・トレイル0の誘致
- ・シダックスによる昼食（お弁当・豚汁）の供給
- ・地域クラブのクラブ紹介ブースの設置                      などなど

それが成功か失敗かは別にして、今回のインカレが今後のインカレへのあり方を考える上での参考になる部分もと思われます。地域や会場の制約等により、今年度の大会で出来たこと必ずしも出来るとは限らないし、時代と共に考え方は変化することもあります。また、全てを例年のインカレにあてはめて、運営形式をマニュアル化することは難しいでしょう。また各地域によるインカレ開催では、その地域の独自性も必要でしょう。しかし、学生より好評だったことに関しては、出来るだけ引き継がれてほしいと思います。それが実行委員内部の運営反省&報告書資料だったり、学生時代に自分が味わったインカレの楽しさなり、感動なりを大切に、卒業後に実行委員となり運営者として後輩に伝えていく、その方法は、人それぞれで構わないとは思いますが。

#### 【さいごに】

インカレをどうしてほしいかの要望は、インカレのオフィシャルHP上でのアンケートを取れば意外と集まるものでした。今回も多くの意見をいただき、実現したことの多くはアンケートの要望にあったことでした。アンケートに意見を出された方も、それが実現されていたことに気付いた時には、きっと自分の意見でインカレを変えられる。ということを少しは実感出来たでしょう。

今後も、学生にとってインカレは実行委員会に開催してもらうもの、実行委員会がインカレは学生にやってあげるものというイメージを払拭して、学生・実行委員会と一緒に創り上げていくものというイメージを、より一層浸透させ、またそのための努力を実行して行ってほしいと思います。



## 矢板インカレを終えて

筑波大学4年 小泉 成行



矢板インカレの興奮がまだ昨日のこのように思い出されます。

しかし、インカレ前には「インカレのあとの目標も大きなものであり、インカレが終わってからもボーっと過ごすわけにはいかない」と思っていたのですが、さすがに直後の1, 2週間は心身ともに疲れきってしまい、なかなか次の行動に移ることができませんでした。それはまた、インカレに向

けてどれだけ気合を入れて打ち込んできたかを実感できる期間でもありました。

初めてインカレを体験した岐阜のインカレショート。先輩である村上健介さんの優勝シーンを見たときから、競技としてのオリエンテーリングの素晴らしさを知りました。山口インカレで悔しそうな先輩たちの姿を見たときから負けることの悔しさを知り、日光インカレで表彰台に立つ高橋善徳さんの姿を見たときから勝つことの喜びを知り、そこで初めてインカレチャンピオンを本気で目指そうと心に決めました。

そしてそれから2年が経ちました。自分が出した結果には満足しています。

ただ、それはあくまで1つの大会での結果でしかありません。最後のインカレであろうとも1つの通過点でしかないのです。この2年の間に、インカレの先にある目標をたくさん見つけることができました。それに向けて、これまでと同じように、1つ1つ努力を積み重ね、先に進まなければならないのです。地道で、世間からはたいして注目もされない、そんな作業を繰り返していかなければならないのです。その先には多くの挫折が待っているかもしれません。しかし、その挫折をできる限り回避するよう努力しなければなりません。また、もしその挫折にぶち当たってしまったら、それを最小限に抑えるために何をしなければならぬのかを考え、そしてそれを確実に実行しなければなりません。そういう小さな挫折を繰り返しながら、しかしそれを最小限に留めた者が勝利を得ることができるのです。本気で“勝つ”ためには、こういう世界に足を踏み入れなければなりません。そしてそれはとても難しいことです。

それほどに難しいことを、今回、僕が達成することができたのは、ひとえに筑波大学の先輩方が見せてくださった努力と活躍、そして同期のみんな、後輩たちの応援のおかげだと思います。そして、勝つことへの執念を具体的に伝えてくださった鈴木康史さんの存在がなければ、今の僕はなかったと思います。みなさん、本当にありがとうございました。最後になりましたが、素晴らしい舞台を用意してくださったインカレ実行委員会の皆様、インカレを開催することを許していただいた矢板市・塩谷町の地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

## 矢板インカレを終えて

京都大学4年 番場 洋子

愛知インカレの後の一年間で、私が自分で評価出来るレベルでオリエンテーリングに対して取り組んだのは、最後の3ヶ月だけだと思います。春から秋にかけては、膝の故障を抱え、秋頃は痛み無く走れるようになることさえも信じられなくなって、前向きに競技的にオリエンテーリングに対して取り組むことが出来なくなっていました。

そんなモチベーションの低下した私にやる気を与えてくれたのは、チームのみんなの存在でした。みんなでがんばって、去年より成長したチームで、そのエースとしてふさわしい走りをしてインカレを終えたい。そんな思いを強く抱けるようになったのは12月の始めでした。去年より成長した自分であるために自分に課した課題は、「学生トップレベル以上のレベルに達すること」でした。残り3ヶ月で新しいことに取り組むということに、多少のリスクは感じましたが、他に満足できるような手段は残されていなかったため、やるしかないと思いました。幸い、頼りになるコーチに恵まれ、毎週アナシリスを添削してもらうことができました。インカレまでに残された1レースずつを大事にして、自分の出来る事、出来ない事、自分の目標との差、その差を埋めるための手段を明確にすることを常に意識しました。取り組みを続けた結果、成績を残したいと考えていた早大OC大会で、予想以上にいい結果が得られ、その後は焦ることなくインカレを迎えることが出来ました。

インカレ当日は珍しく眠れない程に緊張していましたが、スタート待機所についた頃には、事前の地図読みのおかげでその場所が完全に頭の中で確認できたからか、急に落ち着いて、自分の出来る事に対する自信がわいてきて、緊張感も楽しむことが出来ました。レースも、ゴールする瞬間まで精一杯がんばる事が出来たと思います。

優勝できたのは、きっかけを与えてくれた仲間、チームメイト、コーチのおかげだったと思います。また、クラブのみんなのラスポゴールでの応援のおかげで最後まで走り抜くことが出来ました。ありがとうございました。

最後になりましたが、学生にとって最高の舞台であるインカレを運営して下さった運営者の方々、素晴らしい地図を作ってくださった方々、本当にありがとうございました。



## クラシックME（男子選手権の部）入賞者コメント

### 準優勝 許田 重治（京都大学4年）

4年間の集大成、人生最後のインカレ個人戦を2位という順位で終えることとなりました。もちろん自己最高順位なのですが、目標は優勝だったので、嬉しさ悔しさ半ばずつといった感じです。ただ、今回のインカレは、がむしゃらに優勝を目指していったというよりは、「本番で最高のパフォーマンスを発揮する」こと、つまりまずレース内容を大切にすることに重点を置いていたので、例年よりは緊張もせず精神的にも安定してレースに臨めました。これについては他にも色々理由があります。前回のインカレで4位入賞していたこと、加賀ICSで惨敗して自分のライバル達の努力、実力に敬意を払えるようになったこと、そして何よりも大きいのが、クラブの皆とひたすらに（コンタを覚えるまでに）地図読みを繰り返したことによってかつてないほどの自信がついたことです。また、ICS以降は、体調管理にも細心の注意を払いました。早寝早起き、日常からタイツをはいて足（膝）を冷やさないようにする（バカにされましたが...）、週1度の鍼による腰痛防止、禁酒、毎日の交代浴、風呂後のストレッチ...とにかく、思いつく限りのことをしました。秋以降全く故障もなく、また（残念ながら）ライバル達がベストコンディションで臨めていないように思えた今回のインカレでまずまず良い体調で臨めたのは、この努力のお陰だと思っています。

この4年間、オリエンテーリングを通して、心身共に本当に自分が成長したこと、またかけがえのない人間関係を築くことができたことを実感しています。これからも僕はオリエンテーリングを続けていきます。今まで関わってきた全ての人に対して感謝の気持ちでいっぱいです。特に、今まで一緒に頑張ってきた京大OLCの仲間達、1年の頃から競い合ってきた同期のみんな、今年1年間コーチングして下さった柿並師匠、毎週嫌な顔もせず鍼をうって下さった寺嶋貴美江さんには本当に感謝しています。ありがとうございました。そして何より、インカレ実行委員会の方々、本当にお疲れさまでした。素晴らしい舞台を用意して下さったことに心から感謝しています。本当にありがとうございました。

### 3位 金澤 拓哉（東北大学4年）

矢板インカレは、これまでで最も苦しいインカレとなりました。準備においても、大会期間中においても、結果においてもあらゆる意味で苦しいものでした。3位という結果については、もちろん満足などできるはずもありません。

インカレで優勝するということは、僕にとっては目標ではなく、自らに課した義務でした。そして、そういう結果になることを、ずっと確信してきました。

12月あたりから、急に右膝が痛くなり、深く曲げることが困難になりました。何の予兆も無く、また何のきっかけも無く起こった不気味な痛みでした。おかげで12月、1月、2月の最も大事な走りこみの時期に、全く思うような走りが出来なくなってしまいました。春からの計画的なトレーニングで、それまでは極めて順調に物事が進んできたので、正直言ってとてもショックでした。

リハビリの筋トレやストレッチのおかげで、徐々に痛みは引いていき、関東学連リレーの時には、ほとんど痛みが消えました。このまま痛みがでなければいける、とその時思いました。思うようなトレーニングが

できないけれど、それまでの準備に自信があったので、何とかなると思いました。

しかし、その翌週からまた痛みがではじめました。そして、インカレまでその痛みが消えることはありませんでした。

僕は「走れる」という自信を持ったうえで、オリエンテーリングをするタイプの競技者です。今回はその大きな軸となる部分がぼっきりと折れてしまいました。そんな状況の中で、焦る気持ちと戦いながら、少しでも速くゴールするためには何ができるか、何をすれば良いかを考え、最後の最後まであがき続けました。決して勝負を捨てませんでした。正直言って、インカレで思うような走りができないと分かったときは、何度も逃げ出したい衝動に駆られました。そこで自分を奮い立たせて、最後まで戦い続けたことは、自分を評価してあげようと思います。

怪我を打ち明けるのはコーチだけ、周りに伝えたら決して良い影響が無い。そう考えていたので、基本的にはこの事実を知っていたのはほんの数人です。リレーのためにも隠さなければならないことでした。そういう事情があるかもしれないのに、その日のうちに各校のエース(上位3人)を集めて、ルートや感じたことを聞くのは、あまり良くないと思いました。ルートだけならともかく、ラップを見て、後半良くないけどどうしたの?と聞かれても、企業秘密です、としか答えようがありません。

#### 4位 大嶋 真謙(北海道4年)

インカレの個人入賞は1年の山口インカレ以降、ずっと目標にしてきました。しかし、その目標は4年のインカレショートまで果たせず、その間にライバルたちが表彰台に立つ姿を見上げ常に悔しい思いをしてきました。

矢板インカレではレース直前まで調整をしっかり行なうとともに平常心で臨むことを心掛けました。前者については今までで一番良い調整ができたと思うし、後者についてはこれまでは周囲の緊迫した空気に惑わされていましたが、今回はレース前に好きな音楽を大音量で聞いて周囲の雰囲気や断ち切ったため、スタート直前まで平常心でいることができました。

さて、レースの方は第一ラジコンまではポスト周りでうろろうしたり、ルートミスをしたというミスをするが多かったのですが、そこからはゴールまでは快調に走ることができたと思います。またレース全体を通じて順位を気にせず、自分のレースができたと思います。その結果、初入賞となる4位という順位を得ることができました。2位までとの差が秒差だったので悔しさもありますが、これが現状の自分の力とっています。

最後に、矢板インカレ実行委員の皆さん、全国のライバルたち、そして北大 OLC の現役生と OB の皆さんへ、どうもありがとうございました。

#### 5位 青木 博人(京都大学2年)

クラシックは特に目標もなく臨みました。しいて言えば20位以内に入らないとカッコ悪いなといった感じでした。だからこの結果は驚き以外のなにものでもありませんでした。表彰式も何か場違いな感じがしてちょっといづらかったです。レースは1ポでつぼってから終始落ち着いて出来ました。僕はいいレ

ースをしたという感触を得ることが出来ない人なので、ストレスを感じながら悪くないという感触を得、レースを続けました。今年一年を振り返るに、やはりオリエンテーリングを真剣にやる人たちと触れ合えたのが大きな力になったなあと思います。同期のライバル、先輩、渋谷で走る人……。数え上げればきりがありません。感謝しています。

最後に運営してくださった方々に感謝したいと思います。ありがとうございました。まだまだヘタツピですが、来年は胸を張って表彰台のより上を目指していきたいです。

#### 6位 佐々木 良宜（筑波大学3年）

「インカレクラシックで表彰台に立つ」というのは去年の愛知インカレが終わってから自分の中で立てた目標でした。結果として、この目標が達成できたのは正直言ってほっとしたという感じです。なぜかという、矢板インカレに向けて団体戦を意識した準備しかできていなかったからです。なので、これは今まで個人戦団体戦関係なく競技としてインカレに向けて準備してきた結果であると思っています。しかし、この結果に対しては悔しく思い、自分に納得いかなく思うところもあります。それは個人戦に向けてのしっかりとした準備ができなかったことと、インカレショートの時と同様に、ひとつ上の順位に2年生の選手が入賞していることが挙げられると思います。

これまで僕はインカレで「正しい準備を1番よくしてきたものが勝つ」ということを身近なところで2回もみることができました。次のインカレでは先輩の小泉さんに続いてこのことを後輩達の前で証明したいです。



## クラシックWE（女子選手権の部）入賞者コメント

### 準優勝 宮内 佐季子（京都大学1年）



もともと足の遅い私だが、国体（山岳競技）に向けた練習の中で上りのダッシュ力が信じられないほどついていった。その後の練習でスピード、スピード持久力もついた。今までではありえないタイムでインターバルをこなせるようになった。私は私の競技生活のために持久力は重視してきたけどスピードが欲しいと思ったことはないし今でも欲しいと思わない。ただ、インカレでエリートを走らせてもらうのにあんまりなめた真似はできないと思い、皆の練習に混ぜてもらって自分ひとりでは絶対に

にしない練習もやってきた。まだまだ遅いけど少しはましになった。

足の遅さ以上に問題だったのはオリエンが下手なこと。本格的にオリエンを始めてから1年間、結構頑張ったつもりなんだけどなぁ。でも、下手は下手なりに数はこなした（国体が終わってからは週末にオリエンをしなかったのは1回だけ。）ので自分が行けるルートを探せるようになってきた。

そんな訳で人と勝負するようなレベルではないのに、レースとなるとどうしても楽しくてしょうがない。インカレは天気も良かったから最高に楽しかった。ただのアホ？レース内容は自分としては最高。客観的に見れば下手くそ。ぬるすぎる。2位。悔しくないわけではないけど悔しがるのもおこがましい。2位になれたんだから素直に喜べ。でも喜べない。精進します。

最後に、オリエンテーリングでお世話になった全ての人に感謝します。そして、これからもよろしくお願ひします。

### 3位 石川 裕理（京都大学3年）

私が3位に入賞できたことは、私自身びっくりしたし、私にしては出来すぎでした。でも、まぐれでも入賞できるくらいまで頑張れたのは、周りの人々のおかげです。合宿に行ったときに声をかけてくれたOGの人たちや友達のおかげで、くよくよ悩んでいたことがすっきりしたし、それになにより私には常に番場さんという先輩がいました。本当にいい環境に恵まれたなぁと思っています。

前期は授業が忙しくて、演習が終わって家に帰る頃はもう真っ暗で、始めは「もうサークル行かなくなるかもなぁ」と思っていたくらいだったんですが、4月末にJWOCに行くことを決めてから、私が行ける夜9時ころから、女子で週に何回かトレをしました。一人では絶対続かなかったと思います。この時期が私にとって一番充実していました。というか、やることがあまりに多すぎて、精神的にネガティブになる余裕がありませんでした。

後期は時間的に余裕ができて、10月はいろいろ考えすぎて自分が嫌になっていました。でもショートが終わったあたりから、徐々に普通になってきて、年が明けたころからは具体的なリレーの話も出てきて、チームとして走るのが楽しみになっていました。2月の中旬に風邪を引いて長引いて、精神的にまたネガティブになってしまったけど、インカレが楽しみだったからこそ立ち直れたんだと思います。

一年間の締めくくりにあつたインカレという舞台があったこと、感謝しています。

#### 4位 大塚 泰恵（金沢大学2年）

遅くなり本当に申し訳ありません。今年の矢板インカレはとてもたくさんの方を経験させてもらいました。そしてそのことによりこれからの具体的な目標をたてることができました。そして来年は実力をつけてまたエリートを走れるよう努力したいと思います。

#### 5位 山本 真美（東京女子4年）

あの時の自分の実力が、あの結果なんだと受け入れている。

レース内容は、4 - 5の尾根たどりで地形のイメージや方向を正しくもつことが出来なかった。中間までに時間がかかったが、それ以外は難なくこなし、ミスした後の精神状態の建て直しはうまく出来た。気負うことなく、自分の走りのできたことに満足している。

一年前の愛知インカレでは44位、関東本セレすら通過できず繰り上げだった私でもここまで来れた。やり方さえ間違えずに、真に努力すれば最後の1年でも成長できる。皆さん頑張ってください。

#### 6位 高橋 ひろみ（慶応義塾4年）

多くの人の予想通り6位になりました。

矢板は標高差が少なく、ゴツイ登りが少ないため、比較的私の得意なトレインのはずでした。私は走力派オリエンティアではない(と思っていた)ので、山の中で大きなミスをする事は許されませんでした。しかし、3 - 4でミスをし、その後も焦ってミスを連発してしまいました。かなりへたくそなオリエンテーリングでした。あとでラップを見たら、相対的に山の中より道走りの方が早く、10番ポスト後ラストの道走りで7位から6位になっていました。10秒差でした。今年度は最初から矢板インカレに向けてトレーニングをしていました。嫌いな登坂やスピードを上げるためのトレーニングもしました。だから、走り勝てたのは嬉しいです。このときほどトレーニングをしていて良かったと思ったことはありません。レース全体の内容と結果には大満足とはいきませんが、インカレまでの準備にはとても満足しています。それと、やはり表彰台からの眺めは最高です。楽しいインカレをありがとうございました。



## インカレ団体戦優勝を勝ち取って

京都大学 4年 許田 重治



(写真 左から許田選手、新宅選手、西尾選手、岡野選手)

京大は昨年の愛知インカレで惜しくも準優勝。今年はどうしても優勝したい、そういう思いがありました。だからこそ、今年勝ち取ることのできた優勝は格別の思いで受け止めています。そして、その優勝は団体戦を目指してきた全ての選手やコーチと共に切磋琢磨し、支えあってきて初めて実現したものなのだ、と考えると改めて嬉しさがこみ上げてきます。

目標は優勝である、と口にするのは簡単です。しかし、それを実現すること、またそのための努力を皆でしていくことは本当に大変なことです。何度も話し合いの場を設け、お互いに本音を述べあい、そして耳を傾けました。話し合いを重ねていくうちに、信頼感、連帯感が生まれ、「優勝するのだ」という意識が段々とはっきりしたものになっていきました。

また、昨年の「ピジュアル後のルートミスで4人中3人がやってしまった」といったような気を配れば防げたミスを繰り返さないような配慮ももちろん行いました。今年は、「第1パブリック後は、放送や声援がずっと聞こえるはずだ。ここからは、周りは遮断して、落ち着いて自分に集中しよう」といったことを4人で前日に確認しあいました。また、他の大学が崩れていく中で「それぞれが自分のレースをしっかりとしてくる」事ができたのも、チームメイトへの絶大な信頼があり、チームが一丸となっていた何よりの証だと思っています。

来年は、今回走った4人のうち、3人が残ります。そして、元気な後輩もたくさんいます。来年は、まだ京大が過去になしえていない連覇をきっとやってくれるでしょう。そして、女子も必ずや...

運営して下さった実行委員会の皆様、本当に素晴らしい大会をありがとうございました。





（写真 左から川島選手、山本選手、田島選手）

東京女子大学は今年のどこよりもチームとしてまとまっていたと思う。今まで閉鎖的だったチームの話合いも、今年は東女ちゃんみんなと相談したし、ICやICSのために東(強・狂・競)女子大ののぼりを作ったり東女トレを通してお互い仲良くなっていったと思う。みんなで夢を共有できた。また、常にそうあるべきだと思っていた。

そしてチームの3人は、それぞれが、レースで何をすべきかよくわかっていたと思う。レースは聖子もさっぺも好走、文句なし。私自身は、2走にもらった順位を守ろうと考えていた。2回のミス。「自分のために走り、自分のために笑ってください。」オフィシャルからもらった言葉。山の中では自分のため、道走りは応援してくれるみんなを思って走った。「3人がそれぞれの力を出したら結果はついてくる。」基本を忘れず最後まであきらめなかった者の勝ち。当初、優勝候補には挙げられてはいたが、自信がなかった。少しずつみんなが精神的にも技術的にも成長して、ブレセレは参加者全員が通過、本セレでは2人が落ちてしまったが6人のエリートが出た。今までの東女月木トレ、MAPトレ、東女合宿(トレ)、織田フィールド、たくさんの種が、実を結び始めた。

私自身の大きな大会での優勝、聖子のICS優勝や後輩の伸びが、自信につながった。「努力した人みんなが勝つわけではないが、勝つ人は努力した人」だれかの言葉。夢が現実のものとなった。

**「夢も目標も、本当に叶えようと真剣に努力すれば、叶わないものはない。」**

来年がある皆さん、東女ちゃんたち、頑張ってください。

## リレーME（男子選手権の部）入賞者コメント

### 準優勝 東京大学 加藤弘之

われわれ東京大学は、「全国制覇」を目標に一年間やってきました。そして、僕らがそれを成し遂げた時に一人でも多くのOLK会員と一緒に心から喜べるようなチーム作りをしようと思っていました。しかし、秋頃までは、チーム全体の雰囲気あまり良くなく、それとともに結果の方も芳しくありませんでした。そのとき、みんなできちんと腹を割って話せたことでチームの意識がインカレに向かって行ったと思います。東大としては、良い感じで矢板インカレに臨むことが出来ました。このようなチームを形作ってくれた先輩、後輩、同期には本当に感謝します。しかし、結果として僕らは敗れてしまいました。



個々人としては、力を出しきったとは言い難いです。しかし、チームとして、これが実力だったと思いますし、東京大学らしい走りができたと思います。

その僕らの走りが後輩達の心に何かを残し、それによって後輩達がまたインカレに対して熱い思いを抱いてくれたら言うことは無いです。後輩達が僕らの雪辱を晴らしてくれることを期待しています。

最後に、素晴らしい舞台を用意していただいたインカレ実行委員会の皆様に厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

### 3位 早稲田大学 榎本 和弘

早稲田大学第3位という結果には、クラブ員一同大変喜ばしく思っています。メンバー一人一人は紙面が足りなくなるほど書きたいことは山ほどあると思います。今年度早稲田大学は、夏の時点で団体戦優勝を目標に掲げて、ここまでがんばってくる事ができました。優勝すれば3連覇という快挙が待っていたのですが、メンバーは一新されるという状態で多くの事を一つずつ模索しながらやってきたと思っています。クラブ員全員がゼロからの出発であり、3位まではいあがってきたという思いでした。私達が、この3位という結果から何を学んだか、私なりに思った事は、昨年までの2連覇を体験した事で表彰台は遠くないという考え方を持つ事ができ、それゆえインカレに勝ちに行くという積極的な姿勢と、そのための実際の行動力、クラブ内の一体感が生まれた事があげられると思います。今まさにこれらを持って来年に向かってるので、大いに期待しています。ポテンシャルは本当に高いので、きっとまた素晴らしい結果を残してくれる事でしょう。素敵な思い出をくれたクラブのみんな、運営者の方々、矢板に感謝いたします。



#### 4位 東北大学

1走 堀江 守弘 東北大は1年間インカレ団体戦優勝を目標に活動してきました。ですから、矢板インカレは勝つためのインカレでした。しかし、結果は4位と惨敗でした。悔しいです。来年は絶対勝ちます。そのために、今から、やることをやるだけです。素晴らしいインカレを開催して下さった実行委員のみなさん、どうもありがとうございました。そして、ご苦労さまでした。

2走 禅洲 拓 俺がカリスマだ！

#### 6位 新潟大学 樺沢 直行

今年は飛び抜けた実力をもつエースと呼べる選手はいませんでした。高いレベルで実力の均衡した4年生を中心に団体戦入賞を目指して頑張ってきました。リレー当日は力強い応援にも後押しされ、4人それぞれが大きなミスをする事なく集中してレースをすることができたと思います。ずっと目標にしてきた入賞だったので、それを実現させることができ本当にうれしく思います。また、この結果を残せたのはリレーを走った4人以外の多くの人の力が大きかったと思います。同じ北信越学連として頑張ってきた金沢大OLCのみなさん、よい刺激になりました。これからも一緒に頑張りましょう。そして、素晴らしい応援をしてくれた新大OCのみんな、OB OGの方々、1年間サポートをしてくださったオフィシャルの方々、ありがとうございました。

## リレーWE（女子選手権の部）入賞者コメント

### 準優勝 東北大学 姫野 祐子



東北大学はリレーWE 2位に入賞しちゃいました。  
リレーメンバーは1走者・本多祐子（4年）、2走者・姫野祐子（2年）、3走者・半澤美咲（4年）。リレーは走順で決まるということが身にしみてわかった一戦でした。本多先輩は1走になることが多く自分の性にも合っている、私は一番集中できるのは2走、半澤先輩は追い込まれて実力を発揮するタイプだから3走と決まりました。印象的だったのは本多先輩からタッチを受けるとき倒れそうに入ってきたことです。その映像はレース中苦しくて歩こうとすると息を吐き出して「まだ走れるはず。」と必死になれました。半澤先輩の「リレー中私はメンバーのことを考えている」という言葉も頭の中で回

っていました。半澤さんの最後の走りも東京女子大の選手に終盤、はち合わせをして最高にトップスピードでした。思い出すと気持ちが高ぶってきます。東北大と宮城学院女子大のおかげでここまで来れたんだなあ。本当に感謝です。

最後に宣伝。今年度のインカレで北東学連は暴れますよ！東北大はもっとすごいですよ！レベルアップしてまた挑戦しに行きます！

### 3位 筑波大学 二俣 みな子

私たちは選手権のメンバーを決定するためにセレクションレースを行い、決定後は各人の性格や適性を考えて走順を決めました。目標には優勝を設定していましたが、京都大学の存在が大きかったため、各走順においていかに京都大学にくらいついていけるか、ということを中心にイメージを組み立てていました。結果としては私自身冷静さを失い、大きなチャンスがあったにもかかわらず優勝をのがすという残念なものになってしまい、リレーの難しさについて痛感しています。しかし（いささか身びいきかもしれませんが）トップで戻ってきて1走としての役割を果たした黒河や、2走高野の落ち着いた走りは今回のインカレにつながるものだと考えています。

最後に、すばらしい舞台を運営していただいた実行委員の皆様、本当にありがとうございました。

### 4位 千葉大学

1走 蓬萊 真子 レース前は実力通りのものを出せば入賞は出来る、上がコケれば上位も狙える、という自信はありました。ただ、「実力通りのものを出すことが一番難しい」とも思っていたので無理はせずそれぞれ自分に出来ることをしようとチームで話しあっていました。上がコケてくれなかったんで上位には食い込めませんでした。こういう結果が出せて満足しています。チームメンバーの響子ちゃんとさわ、オフィシャルの藤田さん、応援してくれた皆、インカレを開催して下さった実行委員の皆さんに感謝しています。ありがとうございました。

2走 原 響子 4年生の二人と一緒に走れるのはこれが最後だったのでとても緊張し、「二人の最後のレースに恥じない結果を」と、自分で自分を追い詰め過ぎていたところもありましたが4位入賞という結果が出せてホッとしたというのが今の気持ちです。

すばらしい舞台を提供してくれたインカレ実行委員の方々、ありがとうございました。

3走 高瀬 彩和 成功しても失敗してもこれが四年間のレースで一番最後なのかと思うと緊張しました。なるべく順位は意識しないようにしていたけれどもやはり気になって見てしまいました。タッチしたとき入賞できないかもしれないとも思いました。でも自分のペースで淡々とこなしてゴールすると順位が上がっていて嬉しかったです。結果として最後にいい思い出ができました。部員のみんな、オフィシャルの藤田さん、応援してくれた皆さん、インカレ実行委員の方々、ありがとうございました

## 5位 京都橘女子大学

1走 塩田 純子

2走 横澤 夕香 入賞はもとより、トトカルチョの為に書かれた予想順位を遥かに上回ることができたのが、一番うれしかったです。予想者の悔しがっている顔が目に見えます。来年は6年連続入賞を目標にがんばります。うちのエース2人に清き一票を！！最後に、大変お世話になったコーチとOGの先輩方、ありがとうございました。

3走 松田 亜希子 これまでずっと、誰よりも遅い成績しか残せてない中リレー本番をむかえることになり、不安な気持ち半分、代表チームで走るからには恥ずかしくないレースをしたい、といった心境でした。ところが、1走の純子先輩が走り終えられ、情報を教えていただいた時「今日は必ず上手くいく」と確信できました。また、レース中にビジュアルで、たくさんの方々に応援していただいたことや、二人が好タイムで会場に戻ってきたことで気持ちをプラスに切り替え、レース展開を良い方向に向けられたと感じています。クラブの為に良い結果を残せて本当によかったです。ありがとうございました。

## 6位 相模女子大学

一走（望月）：インカレで初めて走る一走、とても緊張しました。後の2人に迷惑をかけないように、泣きそうになりながら走りました。

二走（鈴木）：道走りが多く苦手なコースでしたが、もっちーの結果を無駄にできない、ちいちゃんに早く会いたいと思い走りました。

三走（井手）：今年はみんなに迷惑をかけたので、ここで入賞しなかったら女じゃない！と思い、痛かったけど、死ぬ気で走りました。

最後の1年、悔いのないように納得できる結果を残せるように、成長をめざします。



## 矢板インカレ大会役員名簿



(2002年3月10日/矢板市総合運動公園にて)

大会会長 河合利幸 (日本学生オリエンテーリング連盟会長)  
裁定委員 広江淳良 田代雅之 関口道広  
コントローラ 柿並義宏  
コントローラ補佐 竹澤聡

実行委員長 青柳琢  
競技責任者 渡辺研也  
コースプランナー 金子恵美 山口大助  
企画責任者 吉松俊  
渉外責任者 山口尚宏  
資材責任者 今泉知也  
高原山麓大会担当 木俣知大  
エントリー担当 石原伸晃  
ホームページ担当 上村雅俊

運営責任者 庄司拓央  
副競技責任者 白土英治  
地図責任者 石澤俊崇  
会計責任者 千脇義崇  
広報責任者 白井久一  
人事責任者 中村知晴  
モデルイベント担当 梅原崇一  
宿泊輸送担当 高橋美和

## 《当日配置》

<b>本部</b>	青柳琢[千葉 94]	今泉知也[早稲 93]	庄司拓央[東京 94]	白土英治[東北 94]
	中村知晴[東京 95]	山口尚宏[筑波 95]	渡辺研也[東北 94]	
<b>受付</b>	須藤万里子[千葉 94]	石原伸晃[東京 97]	木俣知大[東農 96]	
<b>会場</b>	山内祐子[本女 94]	佐藤時則[東北 94]	千脇義崇[筑波 95]	
<b>スタート</b>	宮佐俊佑[筑波 96]	池田和香子[東北 97]	石澤俊崇[早稲 93]	梅原崇一[千葉 96]
	大家哲朗[東北 96]	片岡由起子[筑波 92]	塩田美佐[筑波 97]	志村直子[図情 93]
	水嶋孝久[静岡 95]	山口季見子[千葉 96]	渡辺円香[筑波 94]	
<b>ゴール</b>	秋沢和宏[中央 94]	井上アヤ乃[東北 97]	金子恵美[東女 94]	(小嶋祐介)[名古 96]
	近藤貴文[東京 94]	清水英仁[早稲 96]	下村淳子[東北 97]	田村洋一[東北 96]
	萩谷太郎[東工 96]	森栄理子[図情 94]	山口大助[千葉 94]	
<b>計算センター</b>	下村正夫[東北 95]	金谷敏行[東北 96]	出島秀一[東北 93]	西脇正展[東京 96]
	山内亮太[早稲 92]	若梅友則[農工 92]		
<b>演出</b>	吉松俊[農工 95]	井上直幸[筑波 97]	大西淳一[東京 92]	緒方孝史[千葉 96]
	上村雅俊[横国 95]	河野真理[本女 95]	岸野義宏[東京 95]	白井久一[農工 94]
	寺島真介[農工 97]	野田みどり[北海 94]	原田山人[早稲 96]	前田直毅[慶応 97]
	山本保[理科 94]	与儀裕子[実践 94]		
<b>救護</b>	上野大悟[東京 96]	石井龍男		
<b>宿泊輸送</b>	高橋美和[信州 93]	皆川農弥[東京 95]		

<b>協力</b>	木村佳司 土方隆 (日本学連理事)
	山川克則 羽鳥和重 (R.M.O-サービス)
	的場洋輔[東京 98]

## 地図調査

### 『やしお』

調査・作図者	中村弘太郎	山川克則	小暮喜代志	太田晃弘	
	千脇義崇	井上直幸	石澤俊崇	水嶋孝久	
	岸野義宏	木俣知大	白土英治	渡辺研也	佐藤時則
	大家哲朗	金谷敏行	田村洋一	中村知晴	小嶋祐介
お手伝い	柿並義宏	山内亮太	梅原崇一	緒方孝史	金子恵美
	塩田美佐	下村淳子	庄司拓央	西脇正展	吉松俊

### 『番匠峰古墳』

調査・作図者	石澤俊崇	井上直幸	水嶋孝久	金谷敏行	田村洋一	佐藤時則
	下村正夫	中村知晴	白土英治	羽鳥和重	中村弘太郎	山川克則

## インカレスタッフより ～インカレを終えて～



今回のインカレはクラシック・リレー競技とも全クラスでEMITシステムを導入した初めてのインカレになりました。EMITシステムで統一した理由は、実行委員の役員数を減らすと同時にインカレという高い競技性を保持するためであり、矢張りインカレでは計セン直属の役員数わずか6人という人員圧縮に成功しました。これは第22回日光インカレの14人、第23回愛知インカレの11人と比較しても非常に少ない人員で運営ができることを示しており、近年のインカレで計時システムの電子化を進めてきた流れの一つの到達点にいられたのではないかと、と思います。

もちろん、新しいシステムの導入に伴いトラブルも多発しました。その中でも一番の問題は当日の計時システム動作不良でした。これは、実際の機材を使って計時システムを仮組み・テストするという事を行わなかったため発生してしまいました。特に、リレーの併設ゴールでは二重の計時システムが一度に両方停止してしまい、あわやゴール時刻確定不能という事態に陥りましたが、かろうじて当日表彰に漕ぎ着けることができました。クラシック当日も機材不足が朝になって発覚するなど各方面にご迷惑おかけしてしまいましたが、システムが複雑化している今後のインカレでは事前に入念な計時システムのテストが必須であると思います。

また、インカレ当日の処理はE-card化で格段に楽になるものの、事前準備はその分負担が大幅に増えています。中でも1500枚近くに及ぶE-cardの管理は頭を悩ませた部分です。今回のインカレでは一人に1枚のカードを割り当ててリレーのチーム編成時は各自でカードのラベルを貼り替えてもらうという複雑な方法を採用しましたが、もう少し簡潔な方法があったように思えます。しかし、学生のみならずのご協力もありカード紛失は全部でわずか2枚で済みました。これは他大会の紛失率から見ても少ない枚数であり、今後のインカレ運営では学生により自主的なカード管理をお願いしても構わないのではないかと、感じています。そして将来的には、学連登録時にマイカードを支給して卒業時まで使い続けるという方式に移行できれば、運営側では資材管理の負担軽減、学生側では参加費の割引と、両者ともに利益が大きいのではないかと考えています。(計算センター チーフ 下村正夫/東北)

今回 IC 運営は初めてでプログラム・報告書の編集をやらせていただきました。働きながら運営にたずさわるのは想像以上に大変でした。とは言っても見やすいものを作ろうと自分なりに工夫しましたが如何だったでしょうか。当日は中間ラジコンをやりましたが、女性エリートの方で「ご苦労様です」と声をかけてくれる方が何人かいてとても印象的でした。その中の一人が優勝したの番場選手でした。レースの合間のこの気の配慮は凄いなと思いました。(広報チーム 白井久一/農工大卒)



### 広告掲載一覧

Team白樺/慶応OLC/多摩OL/静陵会/八ヶ岳レジャーセンター /大阪OLC/日本旅行

## 2001年度(第24回)日本学生オリエンテーリング選手権大会 報告書

発行日 2002年6月2日

発行元 日本学生オリエンテーリング連盟

〒112-0014 東京都文京区関口3-18-2 目白台芙蓉ハイツ104号

Phone & Fax :03-3946-6507 e-mail: [uofj-j@orienteering.com](mailto:uofj-j@orienteering.com)

発行責任者 青柳 琢 (大会実行委員長)

編集責任者 白井 久一 (広報責任者)

印刷・製本 R.M.O-Service

インカレマスコット(やまちゃんとはっくん) 西村 美紀

写真提供 桐田 幸宏/表紙 京都大学 リレー優勝 胴上げ